

独立行政法人水資源機構理事長賞（優秀賞）

「ありふれた水に思うー二つの感謝」 福岡県 福岡教育大学附属福岡中学校 二年 宇野 由里子

「走らずに前に詰めて！」

指導員の先輩方の大きな声。黙々と歩く集団。鍛錬遠足練習の日、晴天に恵まれ、ワクワクしすぎて水筒を忘れてしまった私。日頃は美しい河畔の散歩道が自慢の室見川。鍛錬遠足だけあって、先生・先輩方の雰囲気も厳しい。シジミとりや潮干狩りに来る見慣れた風景も、今日はギラギラと照り返しうらめしい。

折り返し地点でのお昼の時間。公園によくある飲み水用の蛇口を見つけ、弁当よりも何よりも先に思いつき水を飲んだ。のどの渇きが癒されるなどという表現では足りない。体中の隅々まで潤いが染み渡るようだ。一度飲み終わって、いや、またもう一度。

「はあー、ホツとしたあー。」

本当にその水道水はおいしかった。心から、有り難いと実感した。

後日、悠々と流れていたあの室見川と水道水の関係に興味がわき、調べてみた。室見川の水は福岡県糸島市の瑞梅寺の水源で生まれ、曲渕ダムに運ばれ、夫婦石浄水場できれいにされて水道水となり、私たちの家庭まで届けられているらしい。百五十万都市の福岡市では、一日になんと四十万トン、学校のプールにして千百三十杯分の水が利用され、それを近郊五つの浄水場でまかなっている。頼りは福岡市に流れる百三十二本の川なのだが、実は水の豊富な川がなく、雨が少ないときには水不足になる恐れもあるほどらしい。昭和五十三年に実際に起こった大渇水を、両親も小さい頃に体験して覚えていた。降雨量が少なかったその年は、何回かの断水を繰り返したそうだ。当時の写真には、乾き切った細かく地割れした地面や、給水車に長い列を作るポリバケツを持った市民たちが写っている。

現在、久留米市を流れる九州最大の河川筑後川から、三十キロもの距離を大きな導水管でつなぎ、水を引いている。大変だったあの遠足の三倍もの距離をはると、二十四時間三百六十五日、絶え間なく水は駆けつけてくれ

る。久留米は両親の出身地だから、福岡県下で協力し合っていることがありがたく、心強く思った。

そもそも、この貴重な水はどこからくるのか？よく考えてみると水は地球の中を巡っている。雨が山に染み込んで、湧き水となって現れて、それが集まり川となり、海まで流れて蒸発し、その水蒸気が雲となり、大地に雨が降り注ぐ。まさに大自然の営みである。我々人間も含めたすべての生物を生かす奇跡の仕組みである。ただそれだけでは終わらない。その川の水が浄化され、無事家庭まで届くまでには、多くの人の努力がある。この「大自然」と「人の努力」は、二十四時間ずっと絶えることのない営みである点が共通している。この二つが合わさって、日本にいる私たちは、いつでも蛇口をひねれば新鮮な飲み水を手に入れることができる。安心して日々生活を送ることができるのである。

生まれてから今まで断水などにあったことがない私も、熊本地震の際は、自然災害の厳しさと、普段の水のありがたさを思い知らされた。家族皆が大好きで通ったあの阿蘇が被災して丸二年が経った。そもそも私が毎日お世話になっている筑後川は熊本本の阿蘇生まれだ。熊本の水のおかげで日々の安心があることを思うとき、私はいつも、

「まず隣人を愛しなさい（マザーテレサ）」の言葉を思い出す。人は一人では生きていけない。まず自分に出発することから始めよう。あの遠足の日の公園の水は、阿蘇生まれの水だったかもしれない。

いつものように、また新しい朝が始まる。顔を洗うために蛇口をひねる私は、最近はずっと蛇口を少し戻す習慣がついた。阿蘇の大自然や熊本の復興を願いつつ、「大自然」と「人の努力」に感謝しながら、貴重な水を大切にしていこうと思う。